

## 7 月第 3 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 7 月 16 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 8 主日

■説 教： 保科けい子 牧師

■説教題：「 生き返った青年 」

■聖 書：使徒言行録 20 章 7～12 節（新約 p253）

■讃美歌：3 「 扉を開きて われを導き、」

464 「 ほめたたえよう、主のみめぐみ。 」

7 月は本日を含めて、残り 3 回の主日礼拝も使徒言行録を取り上げたいと思います。なぜなら、今の私たちが立川教会で週の初めに日に共に集い礼拝をささげている元の形が、使徒言行録には記されているからです。使徒言行録は、大まかに言えば、1 章から 12 章までは聖霊降臨によってエルサレムに誕生した初代教会の様子やそこに属していた何人かの弟子達の活動が描かれ、特にその中心人物であった使徒ペトロの活動が語られています。その後の 13 章以降は、すでに 7 章の終わりから 8 章の初めに登場してきているのですが、9 章で劇的な回心の出来事が描かれ、13 章の 9 節で「パウロとも呼ばれていたサウロ」と記されている使徒パウロの働きを中心に描かれています。「サウロ」はユダヤ的な名前であり、「パウロ」はギリシャ・ローマ的な呼び方です。ですから、その呼び方の変化からも明らかなように、使徒パウロを中心にした宣教活動によって、キリスト教が広く世界に広がっていく様子が語られているのです。先週お話しした使徒言行録 16 章の話は、キリスト教がヨーロッパ大陸に広がっていき、最初の教会であるフィリピ教会が成立したことと関連がありました。

そして、本日の聖書箇所である使徒言行録 20 章 7 節以下の話は、トロアスという町が舞台になっています。お聞きいただける方は、聖書の後ろにある付録の地図の「8 パウロの宣教旅行 2、3」で見たいのですが、トロアスは小アジア、今日のトルコの北西、エーゲ海に面した港町です。この町は、パウロの伝道旅行において大変大事な意味を持っています。第二回伝道旅行でパウロは自分の願いや計画に反してこの町へと導かれ、そしてそこで、一人のマケドニア人、つまりギリシャの人が助けを求めている夢を見たのです。そこに神様の導きがあることを確信した彼は、エーゲ海を渡ってギリシャで伝道しました。主イエス・キリストの福音がヨーロッパに伝えられていく一つの道がそこに開かれたのです。そういうわけで、トロアスは、パウロがヨーロッパへと伝道の足を伸ばす、その出発点となったのです。そして、本日の 20 章 7 節以下の記述は、いわゆる第三回伝道旅行と呼ばれているのですが、使徒パウロたちが再びトロアスにやって来て宣教活動をする様子が語られています。

7節は「週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっていると、」と書き出されています。この日は、パウロたちが翌日にはトロアスを去るということもあって、多くの人々が集まっていました。そして、熱の入ったパウロの話は夜中まで続いたので、この集会が行われていたのは、「階上の部屋」だったと8節にあり、そこは「三階」だったことが9節から分かります。その窓のところに腰掛けてパウロの話を聞いていた青年が、パウロの話が長々と続いたのでつい眠り込んでしまい、三階の窓から下に転落してしまっただけです。人々が慌てて降りて行って抱き起こしてみると、既に死んでいました。しかし、彼らに続いて降りて行ったパウロは、彼の上にかがみ込み抱きかかえて「騒ぐな。まだ生きている」と言ったのです。この言葉を表面的に読むと、その場にいた人々は、高所から転落した青年は死んでしまったと思ったけれども、実は気を失っただけで、パウロはそれを冷静に見極めたのだ、というふうにも受け取れます。然しここに語られているのはそういうことではありません。この青年は本当に死んでしまったのです。三階から落ちて即死だったのです。パウロが「まだ生きている」と言ったその言葉は、元の言葉では「彼の魂は彼の内にある」と表現されています。彼は、実際に死んでしまった青年を抱き上げて、そのように宣言したのです。その宣言によって、この青年は生き返ったと言えるでしょう。死者の復活という奇跡が使徒パウロによって行われたのです。

同じような出来事が、使徒ペトロによっても行われたことが使徒言行録の9章40節に語られています。「ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。」本日の話はこの話と対になっているとすることができます。つまり、初代教会の中心人物である使徒ペトロも使徒パウロも、主イエス・キリストによって約束された聖霊を受けることによって、そのような死者を復活させるという奇跡を行う力を与えられた、ということになりましょう。では、現代のキリスト教会の伝道者たちにもそのような奇跡を行う力が与えられているかと問われると、「私にはそのような力はありません」というのが私自身の正直な答えです。しかし、私にとっての慰めであり励ましの御言葉は、先ほどお話しした9章40節の「ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。」という箇所と、本日の20章10節の「パウロは降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて言った。「騒ぐな。まだ生きている。」」という箇所です。使徒ペトロも使徒パウロも一人で死んだ人の前でひざまずき、あるいはかがみ込み抱きかかえて祈っています。多くの方々と共に祈ることも非常に大切です。しかし、それとともに、伝道者として召された者は死者の前であっても一人で神の前にひざまずき、その時その時に示された人の命のために、自分自身の命をかけて祈ることが求められているのではないかと、姿勢を正される思いがいたします。

そして、本日の箇所を読む上で大事なことは、この出来事が起こったのが「週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっている」ところだったということです。週の初めの日、それは日曜日です。使徒言行録2章42節に、最初の頃の教会の集会の様子を語る言葉として「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」と記されています。つまり、今日の私たちの礼拝における聖餐がそこでは行われていたということです。その集まりの中で、今日で言えば牧師による説教に当たるようなパウロの話が夜中まで続いていたのです。ここでの主の日の教会の礼拝は、夜に行われていたと思われます。つまり、ここに集まっている人々の多くは、昼間働いた上で夕方になって集まって来たのです。ですから、ここに描かれているのは、疲れた状態の中で必死に集りに出席し、御言葉を聞こうと努力している人々の姿です。青年エウティコにとってもその他の多くの人々にとっても、主の日の礼拝はそのようにして必死で守っていたのかもしれませんが。しかし、この礼拝に集っていた人々は、決して、戒めを守らなければならないという義務感で礼拝に集っていたわけではありません。彼らは皆、自分から、喜んで集まって来たのです。それだけの価値が主の日の礼拝にはあるからです。命をかけても守りたい恵みがそこで与えられるからです。12節に、「人々は生き返った青年を連れて帰り、大いに慰められた」とあります。主の日の礼拝においては、このような大いなる慰めが与えられるのです。この「慰められた」という言葉は、本来は「かたわらに呼ぶ」という意味があります。悩み、苦しみ、悲しみが本当に慰められるのは、主イエスの父なる神様が私たちをかたわらに呼んで下さり、語りかけて下さり、主イエスの十字架と復活による新しい命を与えて下さることによってです。そのことが、主の日の礼拝において私たちにも起こっているのです。